58th GALAXY AWARDS ギャラクシー賞贈賞式

2021年6月2日、第58回ギャラクシー賞贈賞式が、東京・渋谷のセルリアンタワー東急ホテルで開催された。

コロナ禍がいまだ収まらぬなか、変則的な開催方式となったのは、昨年と同様だ。緊急事態宣言の延長を受けて、ぎりぎりまで度重なる変更が余儀なくされた。出席者が最小限に絞られ、懇親会も見送られた一方で、開催を6月初めとしたこと、大賞・優秀賞を当日に発表することなど、従来のやり方に戻った要素も多かった。発表までの緊張感など、例年の贈賞式らしい場面が少なからず帰ってきたと言えるだろう。

コロナ禍を逆手にとった新しい試みもあった。ユーチューブを使った「ライブ配信」である。従来なら、会場には600名を超える放送・広告・芸能関係者が集まる。今回はその4分の1以下の入場者だったが、ユーチューブでのライブ配信には、常時3500、最も多いときには7000を超えるビューがあった（アーカイブ動画が来年の贈賞式まで視聴可能）。これにより、かえって多くの人が栄えある瞬間に立ち会え、受賞者が配信で見ている関係者に「ありがとう」と呼びかける姿もあった。

選考対象となった作品は、4部門合わせて743本。部門ごとに入賞作が表彰され、入賞作のなかから優秀賞、大賞作品が発表され、トロフィー「バードマン」が贈られた。

司会は赤平大さん（右）と上野愛奈さん

テレビ部門

❖テレビ部門・大賞

フジテレビジョン**「世界は3で出来ている」**演出・プロデュースの中江功さんは、「1回目の緊急事態宣言のなか、企画を出してから放送まで3週間弱だったので、長きにわたって取材してこられた方などに申し訳ない」としきりに恐縮しながらも、「こんな深い時間の30分ぐらいのドラマが賞をいただけるのは本当に嬉しいこと。大作にも関わってきたが、大作を作ればいいというものではない、ということを改めて教えられたようで感激しております」と喜び、「見え方ではなく、内容だということを意識して作りました。水橋文美江さんの脚本と、林遣都さんがいなければできなかった」と結んだ。プロデューサーの宋ハナさんもステージに上がり、「ソーシャルディスタンスドラマと掲げただけあり、スタッフの健康など作品以外のことも考えなければいけない時代の要素が作品に反映されていたことで、視聴者に届いたものがあるのかな」と語った。

❖テレビ部門・優秀賞

鹿児島テレビ放送**「テレビで会えない芸人」**の四元良隆さん。15年ぐらい前に噂を聞き、ずっと気になっていた松元ヒロさんと偶然お会いして、「テレビ局の人が僕の舞台を見に来ると決まって『面白い、テレビに出せないけど』って言う」と聞いたのが企画のきっかけ。

NHKスペシャル**「イナサ～風寄せる大地16年の記録～」**プロデューサーの伊藤純さん。「仙台局に近くてすぐに行ける所にある集落で守り継がれている日常を、定点観測のように16年間記録してきました。震災で集落はなくなりましたが、基本は変わりません」。

金曜ドラマ「俺の家の話」チーフプロデューサーの磯山晶さんは「長瀬智也さんは身体作りから長期間のトレーニングまでこなして吹き替えなしでプロレスをやってくれました。一朝一夕ではできないお能も手厚いご指導もあって様にできた」と演者の努力を称えた。

ラジオ部門

❖ラジオ部門・DJパーソナリティ賞　落合健太郎

「バードマン、けっこう重いんですね。わーお！という気持ちでいっぱいです」と力強く語り、関係者やリスナーと巡り会えたことに感謝して丁寧に礼を述べた。「師匠から『ラジオDJの大きな役割は、音楽のアンプリファー』と言われました。音楽を紹介するときに言葉を添えることで、その音楽の魅力が増幅されると。これからもその言葉を胸に頑張ります」。

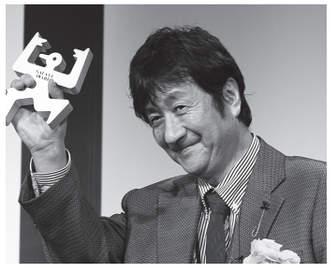
❖ラジオ部門・大賞

戦後75年スペシャル「封印された真実～軍属ラジオ」。文化放送の関根英生さんは「録音を200回近く聴き、ギャラクシー大賞に値する傑作を作ったぞという思いが募りました。実現したことを誇りに思います」と喜び、アンカーを務めたアーサー・ビナードさんは「改めて、『今、ラジオとは何か』を考えさせられました。当時の作り手のほうが、ラジオは姿なき武器になりうるとわかっていた」と番組に出演しての驚きを語った。

❖ラジオ部門・優秀賞

CBCラジオ**河原崎辰也いくしかないだろう！「地域を守れ！外国人とのリアルな暮らし特集」**の菅野光太郎さん。「地域と移住外国人を繋げる活動と出会ったのがきっかけ。難しい問題でも即座に反応してくれるレベルの高いリスナーさんたちにも助けられた」。

静岡放送**「ダンシングジャパン～リズムに乗ったら手を叩こう！～」**。登壇した東京支社の岡田有理さんは、欠席した担当ディレクターの菊池勝さんに、ユーチューブを通じて「聴いていて本当に楽しい番組だなと思い、自分でも笑顔になりました」と受賞を報告した。



ハートネットワーク**「ココロ音ラジオ和音」**。制作の基本は「心の声をラジオの電波に乗せることを番組制作の基本にしていました。こちらが何かを決めてインタビューするのではなく、自然に録ってきたものをそのまま使うこと」とoffice kuppaの乗松佳洲彦さん。

テレビ部門

❖テレビ部門・個人賞
サンドウィッチマン

人の気持ちを包み込む芸風で存在感を発揮し、震災以降はずっと東北の今を伝え続けてきた伊達みきおさんと富澤たけしさんのコンビ。ステージでは、二人が賞状を奪い合う形で笑いを取り、受賞については「寝耳にお湯っていう感じですかね」（富澤）。進行役が「3年連続で好きな芸人ナンバーワンとお聞きしますが」と水を向けると、「そのアンケート、東北新幹線の中で取ってるんじゃないかな」（伊達）、「二人ともフォルムが丸いんで、ゆるキャラ的に見てくれてるんだと思います。コロコロしてるオッサン二人がね、いろんな外ロケしてたらちょっと面白いでしょ」と会場を沸かせた。だが、「これからも東北の現状を、本当に直接聞いて直接見た情報をしっかり伝えていければいいなと思います。あの震災からもう10年も過ぎましたが、いろんな問題が発生しています。福島の原発でも汚染水と処理水の違いをもっともっと伝えていかないといけないと思うんですよね。僕らも原発に行って初めて知ったことですし。海沿いの人たちも頑張っているので、コロナが落ち着いたら、ぜひ東北に遊びに来ていただきたいなと思います」と被災地を慮った。最後は賞状とトロフィーを高く掲げ、明るい笑顔を残してステージを後にした。

❖テレビ部門・フロンティア賞
NHK「光秀のスマホ」

「『麒麟がくる』という壮大なドラマの裏で、フォロワー数を気にしている光秀のドラマをよくやれたと言われましたが、こんなアプリを入れたいとかアイデアが次々に出てきて、スタッフみんなが一つの方向に向かってニヤニヤしながら作れました。こんなに『何かやってやろう』という形で挑めた番組はないんじゃないかな。実は今日は旧暦なら本能寺の変の日。勝ちどきを上げて、明智光秀さんに報告したい」とディレクターの田中涼太さん。

❖テレビ部門・特別賞
日本電波ニュース社

「アフガニスタンは40年戦禍に、10年は干ばつに苛まれていますが、そこにいる人の顔が明るい。それは中村医師の思索と実践の先に強い希望を感じていたからだと思います」と、故・中村哲医師を22年間取材・撮影してきた谷津賢二さん。「私もアフガンとアフガン人が好きになった。中村医師の人間性にものすごく惹かれて、その虜になったということもあると思います。今、天国にいらっしゃるであろう中村医師に感謝を伝えたい」。

マイベストTV賞グランプリ

テレビ東京
木ドラ25「30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」

「規模の小さな作品でしたが、深夜1時で3局しか放送地域がないドラマとは思えない広がり方をしたので、見てくださった方々の愛情で育ててもらったと感じています」と、プロデューサーの本間かなみさん。心の声が聞こえるシーンは無言のなかで撮影するので、タイミングが試行錯誤だったという。主人公を演じた赤楚衛二さんも登壇し、「9話のハグするシーンが一番印象に残っています。ハグをすることによって温もりだったり愛だったりをとても感じて、ゆらゆらしてしまったシーンがすごく印象的でした。自分が魔法使いになれたら？　空を飛んで夜の高速道路を上から眺めたいな」。プレゼンターを務めたGメンバーの早乙女亜弥さんも「心の描写がとても多く、赤楚さんが真摯に人の心に向き合って寄り添っていくシーンが印象的でした。ぜひ続編を作っていただきたいです」と期待を寄せた。

志賀信夫賞

和崎信哉　WOWOW相談役

音好宏理事長から表彰された和崎さん。「1968年にNHKに入局して以来、メディアの世界ひと筋にやってきました。そんな私にとって、志賀信夫さんというお名前は若い頃から、名前を聞くだけでドキドキしたもの。あるときは相当厳しく批評をされ、あるときはわれわれの思った通り書いていただき、スタッフと喜んだ経験があります。私は前半の28年間はほとんどディレクター、あるいはプロデューサーとしてドキュメンタリーを中心に番組制作に関わってきました。後半25年はまったく違って、ハイビジョン化（デジタル化）を民放各社、衛星放送事業者、通信の世界の方々とご一緒に推進してきました。コンテンツの制作と、日本のメディア戦略の構築と、2つを包含してこの賞がいただけたということを、たいへん嬉しく思っています」と喜びを口にした。

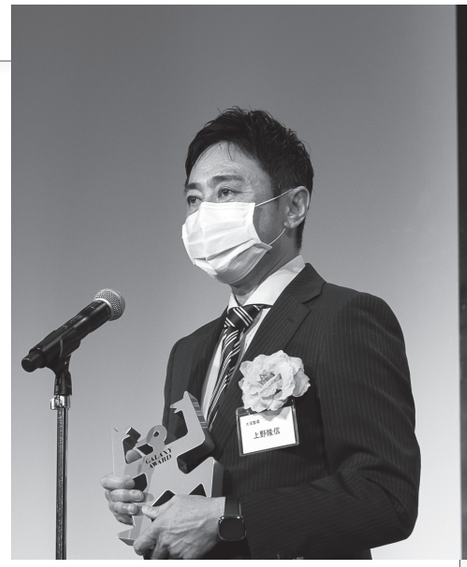
文／飯田みか　写真／岩尾克治、官野 貴、花井健朗、森光 実、吉河美帆

CM部門

❖CM部門・優秀賞

東海テレビ放送**公共キャンペーン・スポット「この距離を忘れない。」**プロデューサーの桑山知之さん。「制作は昨年の5月で、インタビューもZoom、制作自体もほぼすべてリモートでやりました。取材対象者の息づかいがなかなか感じ取れないのが難しかった」と緊急事態宣言下での苦労を語った。

優秀賞の日清食品、大日本除虫菊は欠席のため発表のみとなった。



❖CM部門・大賞

ポカリスエット「ポカリNEO合唱2020（フル）篇」。大塚製薬宣伝部課長の上野隆信さん。「当初500名の中高生が集まって合唱するという企画でしたが、オンエア1カ月半前にコロナがまん延したことで企画を一からやり直し、今の中高生はユーチューブやTikTokなどで自分を表現するのに長けているので、彼らの自撮りを集める企画になりました。リモート映像が溢れてテレビを見るのも嫌になっていたころで、次のステージに進みたいと屋外に出ました。どこよりも早くCMが世の中に出て、感動してもらえ、受賞につながったと思います」。

報道活動部門

❖報道活動部門・大賞

TBSテレビ**「報道特集」40年の歩みとこれから**。キャスターの膳場貴子さんが登壇。「週末の夜にこんな硬派な番組が40年続けられたのは奇跡的です。番組の根幹として、調査報道に挑戦すること、現場からものを考えること、評論家より当事者の声に耳を傾けることの3つを守ってきました。自分が見たいものばかり見るようになったネットに席巻された時代だからこそ、『報道特集』が果たせる役割をこれからもさらに考えて、模索していきたいと思っています」と今後への抱負を語った。

❖報道活動部門・優秀賞

朝日放送テレビの**シリーズ老障介護**。報道課長の西村美智子さんは、制作のきっかけについて聞かれると、「障害者が両親を亡くされたあと、施設やグループホームに入れずにショートステイを何年も転々としているという事実を聞き、これはもしかすると老老介護や他の介護よりも深刻な事態がきていると思いました」と語った。

毎日放送の**映像'20　映像シリーズ40年～関西発・真夜中のドキュメンタリズム～**。「うちの局には『情熱大陸』と並んで『映像'21』をやりたいと志して入ってくるドキュメンタリー志望の制作者もいます。根強いファンからネタを頂戴したりすることもあります」と、報道情報局ディレクターの津村健夫さんは40年続く番組の底力を語った。